

妊娠悪阻に影響する心理的要因についての実態調査

—妊婦に対する考え方との関連

2階西病棟

○山下 作実・大島美智子・竹本三枝子

谷脇 文子

I. はじめに

妊娠悪阻(以下悪阻と略す)はつわりの諸症状が重症化したものであるが、その発症の背景には心因性因子が強く関連していることが言われている。

そこで今回、過去10年間において当院に悪阻で入院した妊婦10名を対象に、入院中のカルテより、妊婦及び夫の言動、態度に焦点をあて心因性要因との関連性について検討したので報告する。

II. 研究方法

調査対象者は1985～1994年の10年間において、当科に悪阻で入院した妊婦10名(初産婦6名、経産婦4名)。調査方法は入院中のカルテより行い、対象群として1990～1995年7月において当科に切迫流産で入院した妊婦20名を無作為に抽出した。

III. 結果

悪阻群は初産婦の6名中4名に流産歴があり、うち2名は悪阻が原因であった。入院期間は、20日以上が6名で平均27.4日であった。経産婦は1名が最長74日であり、流産していた。他は全て軽快退院である。性格は図1に示したように悪阻群の90%が神経質と答え、切迫流産との差が顕著であった。

1. 入院時における治療に対する不安の有無

悪阻群は初・経産婦とも入院治療に対する不安が切迫流産群に比べ、有意に高いことが注目された。(図2)

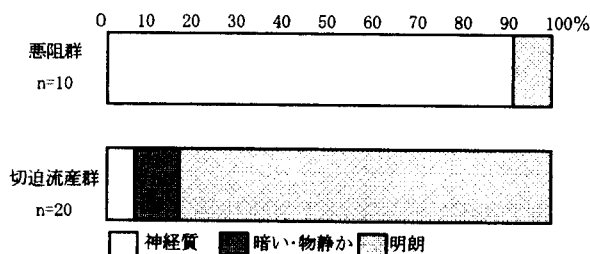


図1 性格(自己評価)の比較

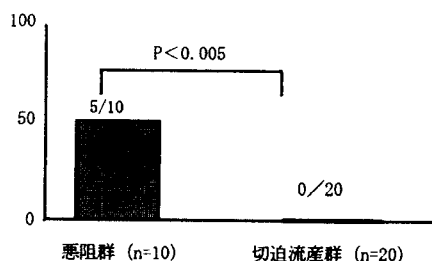


図2 入院時における治療に対する不安の有無

悪阻群の初・経産婦の夫及び家族共に、悪阻が原因で流産歴のある者が妊娠継続への期待と共にその不安が見られた。又、初産婦の夫では入院に対する理解はあるものの、悪阻症状に対する理解不足も見られた。また家族は初・経産婦共に悪阻への心配、協力、支援を表出しており、中でも初産婦の実母1名は過剰な心配を表し、妊婦にあれこれと指図していた。

2. 胎児に関する言動の変化の比較 (図3)

両群とも胎児に関する言動は入院時には全員に見られていたが、悪阻群では入院期間の長期化に伴い半減していた。

3. 悪阻群の入院中における訴えの内容

訴えの内容は初・経産婦共症状に対する身体的苦痛が最も多く、特に初産婦では悪阻症状が長期に及ぶほどこの苦痛の訴えが多くなっている。(図4)

4. 夫あるいは家族の面会頻度と入院期間の関係

悪阻群の夫及び家族等の面会は入院期間が短期間の症例ほど夫の面会頻度は高くなっている。家族の面会頻度は入院期間において変動は見られなかった。(図5)

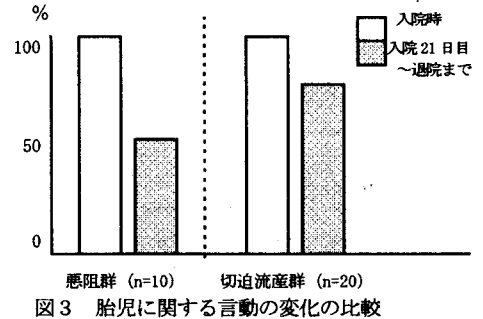


図3 胎児に関する言動の変化の比較

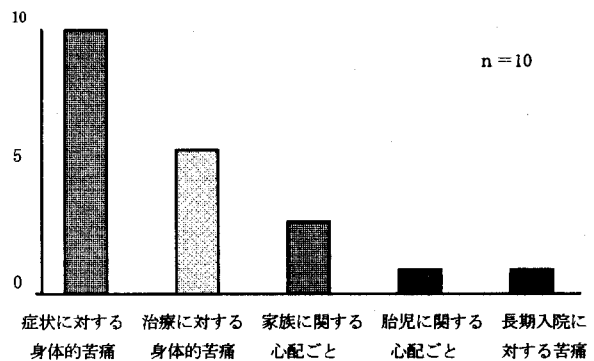


図4 悪阻群の入院中における訴えの内容

IV. 考察

今回の調査により、次の事が明らかとなった。悪阻群に高く見られた神経質な性格が起因となり、入院時の不安が顕著となったと思われる。これに加え、流産や悪阻など前回妊娠体験の影響も考えられる。このことは、夫婦でそ

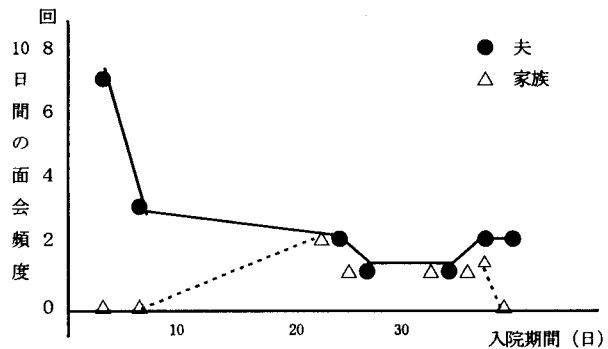


図5 夫あるいは家族の面会頻度と入院期間の関係

の体験にどう対応したかが今回の妊娠への取り組み方を方向付けたと思われる。

悪阻群では入院期間の長期化、身体的苦痛により、妊婦の関心が自己に集中し、胎児

に関する言動の低下を招いたと思われる。

また、夫の面会が入院の長期群に顕著に低かったことは、夫の面会と入院期間の間に関係を示す結果が得られたこととなり、これは夫との関係、特に夫の関心、支援を反映していると思われる。

以上のことから、悪阻群に神経質な性格が多い事、入院中の訴えに身体的苦痛が最も多い事、胎児に関する言動が低下していた事、さらに夫の面会の頻度により、これらは相互に影響しあって症状の悪化の悪循環の形成に至ると考える。

悪阻での入院に対する不安や、胎児への関心が持てない等否定的な心因反応が形成され、ひいては、新道らの述べているような母性意識への発展過程における否定的要因を増加する事となる。これを改善するために妊婦の肯定的な心因反応に着眼してこれを引き出すことが重要と考える。

従って、このような状況にある妊婦の援助、特に悪阻の既往や流産歴のある妊婦はハイリスク群と考え、次のことが大事であることを再認識した。妊婦と夫の妊娠の考え方を総合的に分析し、妊婦とその夫及び家族に悪阻の知識を与え、妊婦の不安定な心理状態について理解し、適切なサポートを行うことができるように指導する。またそれと同時に長期入院、治療に伴う苦痛を緩和することが必要だと考える。

V. おわりに

今回の調査で、妊婦及び夫の妊娠や悪阻に対する考え方が症状に影響していたことがわかった。今後、母性心理面に対するより効果的なアプローチのあり方への検討を重ねていきたいと思う。

参考文献

- 1) 花沢成一：母性心理学，医学書院，1992.
- 2) 新道幸恵、和田サヨ子：母性の心理社会的側面と看護ケア，p12～20，医学書院，1990.
- 3) 伊藤博之・編：妊娠・育児期のこころのケア，p10～16，ペリネイタルケア' 94 春季増刊，メディカ出版，1994.
- 4) 郷久いつじ，斉藤 学：妊娠と心身相関，p9～15，ペリネイタルケア，Vol. 12，No. 9，メディカ出版，1993.
- 5) 我部山キヨ子：妊婦の意識の変化，p31～40 ペリネイタルケア，Vol. 13，No. 1，メディカ出版，1994.

- 6) 島袋香子：妊娠中の入院と看護—心理面の看護，p23～27、周産期医学，Vol. 20，No. 4，東京医学社，1990.
- 7) 根 憲治：つわり・妊娠悪阻，p19～22，周産期医学，Vol. 19，No. 9，東京医学社，1989.
- 8) 藤尾ミツ子：妊娠悪阻の症例への母性保健指導，p65～68，周産期医学，Vol. 11，No. 9，東京医学社，1981.

〔平成7年9月22日，京都市にて開催の第36回日本母性衛生学会
総会で発表〕